③アジアと私

ビルマと私の三十年〈市民の作文 その三〉

土橋泰子

ビルマという国と私が深く係わるようになって、もう三十年近い歳月がたってしまった。日本はアジアにありながら、アジアについては意外なほど資料が乏しい。ビルマはそのアジアの中でも目立たない存在で、一般の日本人にはあまり知られていないし、また関心ももたれない。そんなビルマと私が強い絆で結ばれることになったのには、いくつかの偶然や、縁とでも呼ばれるような運命的なものもあったが、一番の原点を考えると、あの太平洋戦争にまで逆のぼってしまうし、また父の影響を見落すわけにいかない。

私が物心つくかつかぬかという頃、周囲では大東亜共栄圏という言葉がさかんに使われ、子供向けの読み物にも南洋とか、亜細亜という文字が目についた。

幼稚園に行きだしたある日、園長先生が朝礼の時、ドッジボールのような大きな木の実を私たちに見せ、「これが南洋の椰子という実です」と言われた。そして南洋には私たちと同じような小国民が大東亜共栄圏の一員として頑張っていること、その人たちは永い間、イギリス人などからいじめられて来たことこれからは日本人がお兄さんとして助けて上げなければいけない…というようなことを話された。

また同じ頃のある日、デパートか何か賑やかな所で、一風変った女の人たちが、草のようなもので何か編んでいる実演場を通り合わせた。上半身殆んど裸で、やはり緑の草でできたスカートをつけたその女の人たちは、恐らく当時日本の信託統治下にあったミクロネシアの人たちだったのだろうが、その頃の私にはそこまで判らない。「あ、南洋の土人！」私は一緒にいた父に言った。そこを出たあと、父は「土人、土人いうけどな、われわれも土人やで、日本島の土人や」穏やかに言ったのだ。土人、その言葉を冒険ダン吉に出てくるような、今ここに見かけたような、裸で、未開な人々というイメージで口にした私は、父の言葉にハッとする思いであった。今考えれば太平洋戦争開戦前後のあの時代、「南方の国や人を助けて上げる」という言い方がふつうであったあの頃に、あの人たちが土人なら我々も土人だと、彼我の民族と同一平面に置いていた父は、相当ユニークな考えの人だったと思う。とは言え、父は特別高い教育を受けた人ではない。明治三十六年生まれ、商業学校出の平凡な勤め人であった。もちろんまだ子供の私はそんなことに感心したわけではない。ただ、父の言葉「われわれも土人や」で、いわば目から鱗がはがされたのに違いない。でなければ今もその時の言葉や情景がこんなに強く記憶に刻まれているはずがない。

以来私はアジアの人たち、南方の人たちに親近感をおぼえ、無関心でいられなくなった。父はそんな私にその後出版された「大東亜圏童話叢書」というシリーズ本を買ってくれた。この叢書は私の最も好きな書物で、その後疎開、戦災、何度かの引越を経て、今もまだ手元に愛蔵している。第一回配本が確か「クスモの花」という題名の東印度童話集、つまり今のインドネシアの童話集であった。そのあと順序は憶えていないが、馬来童話集、印度童話集、支那童話集、フィリピン童話集、仏領印度童話集などが家に届けられた。西洋の童話に食傷ぎみだった私には、これらの国の話は新鮮で、しかも日本のトンチ話などとてもよく似ていて面白く思われた。しかしその中、日本は紙やインクどころか、印刷する人間さえ不足するようになり、誰にとっても本どころではない世の中になっていた。つぎつぎ配本されるはずだった他の国の童話集も予告だけに終ってしまった。

やがて敗戦。世の中は一変した。境遇が一変しただけならまだいい、まるでペンキ屋が看板を塗り変えるように、世間は鬼畜米英の看板をはずし、あれよという間もなくカムカムエヴリィボディの世界になってしまった。そればかりではない。「南洋の小国民と仲良くしましょう」だの、「大東亜の一員である亜細亜の人々の良き兄となって…」だのと聞かされ

てきたのに、日本はその人達に随分ひどいことをしてきたのだという。いろいろの旧悪が暴露されだした。敗戦を国民学校四年生で迎えた私にはこのことは大変なショックだった。子供心にも恥しい話であった。しかも誰ももうそのアジアの国々に目を向けようとしない。私としてはこれまで関心をもっていた対象が突然目の前から消えてしまったような、読みかけの本を途中で取り上げられたような、そんな状態であり気持であった。シリーズの全巻を読むことのできないままになったあの童話叢書を思うにつけ、あれほど面白い話のある国々の文化をもっと知りたかった。戦後の様子も知りたかった。私はこの地域への興味を捨て切れなかった。

結局私は昭和二十九年四月、大阪外国語大学ビルマ語学科に入学した。アジアのことを知るには、その言葉を知らなくてはならないと考え、アジア語のコースの多い大阪外国語大学に目を向けたのは高校の極く初期だった。最終的にビルマを選んだのは、大学の専攻として学ぶ以上、独習可能なローマ字化された言語でないもの、つまりタイとかビルマのような独特の文字をもったものをやりたいと思った。大阪外国語大学では、当時タイ、蒙古、ビルマ、アラビアの四学科は小さい学科で、タイ、蒙古の両学科が学生を募集する年は、ビルマ、アラビア両学科は募集しないという隔年募集式であった。偶然、昭和二十九年はビルマ語学科が募集年であった。また、敗戦の年四月、四十を既に出ていた父が再度の召集で狩り出され、北鮮での辛酸をなめながらもとにかく生還してくれていたことも幸運であった。でなければ戦災で何もかも失っていた私たちに大学進学の道はなかったろうと思う。

入学のあと間もなく日緬賠償協定が調印され、日本・ビルマ間の国交が回復したことも、私には幸せであった。新しい大使が着任され、後に私が駐目で元々と必死の思いで書いたビルマ留学願いの書を本国政府に伝達して下さったのだから。

入学してから判ったのであるが、ビルマ語の学習は想像以上に大変であった。言語として難しいということでなく、資料、書籍が極端に乏しく、また入手困難なのであった。日本語と対照の辞書はおろか、英語・ビルマ語対照の辞書も戦時中に出た外国もの、複製版が時たま古本屋で見つかるかどうかという状態で、私はこの辞書探しにはついぞ幸運に恵まれなかった。教科書は先生の手書きのガリ版で、その日習ったものはその日の中に頭の中へ叩き込まなければ、あとで辞書を…というわけにいかなかった。アジアの現地語の書物となると丸善もまるで役に立たなかった。残る手段は現地ビルマから入手することだが、双方の外貨事情があって、結局ビルマの友人と物々交換ということになる。それも郵便小包がなかなかちゃんと届きにくいとか、先方で法外な関税が課されるというような事情があって、誰かビルマへ行く人、帰る人を見つけて託送する。またまた向うからも誰かに託して本を送ってくれる。気の長い話であった（この事情は現在も殆んど同じである）。こんなことをしていては四年間は直ぐ経ってしまう。私は大したビルマ語も身につけぬままに卒業することになっては大変だと思い、先述したような留学願を在日ビルマ大使館を通してビルマ政府へ提出した。周囲の人ばかりか、自分でも、独立後間のないビルマが日本から留学生を招んでくれるなどあり得ないことと思っていた。ところが滞在費ビルマ政府負担で一年間留学を許すという通知があった。奇蹟であった。外貨自由化以前の日本であるから、滞在費だけでも先方国側で出してくれる保障がなければ出国させてもらえぬ時代だった。

こうして一九六七年六月から丸一年、私はラングーン大学文学部の聴講生として、最も伝統のある女子寮の一つに入れてもらい、ビルマ語とビルマ文学の勉強に打ち込ませてもらった。

今私は会社員の夫と息子二人をもつ一主婦である。主婦業の傍ら、求めのある時に、ビルマ語の講師として外務省研修所や、大学の夏季講習会の教壇に立つこともある。またビルマ語の翻訳をしたり、通訳をたのまれたり、ビルマ関係の協会紙などにビルマについての雑文を書くこともある。経済的にはもちろん極めて不安定で、夫のスネなしにはとても生きられない。留学から帰って後、さらに両国の交流に役立ちたいなどと思って、ちょうど募集された外務省の語学研修員試験を受け、外務省に入ったものの、「もう留学は済んでいるのだからさっそく実務に……」と言われ、せっかく狙った再留学が叶えられなくなった辺りからツキというか風向きが変ったようである。在ビルマ大使館勤務を待ちながら、結婚生活に入った私は、夫のニューヨーク転勤を機に外務省をやめた。戦後日本の急激なアメリカ化に反撥を感じた私が心ならずもそのアメリカで十年の歳月を過ごし、子供を生み育てて来た。皮肉なものだと思う。しかしアメリカ人の日本人観やアジアへの認識もよく判ったし、やはりその十年は無駄ではなかったと思う。

かつて、ビルマとのかけ橋になるなどと高く掲げていた理想図に程遠い現状には忸怩たる思いがないわけではない。また家族にもっと献身すべきではないかと

自問することもある。けれども独立後日も浅かったあの頃、日本の一女子学生の望みを叶えて下さったビルマの恩義を思う時、何も残さずには死ねない気持がする。ビルマの素晴しい文学を日本人たちにもっと読んでもらいたいし、ビルマ語をただ上手に話す日本人でなく、ビルマ人の心が判るビルマ語の使い手も育てたい。そのためにマイペースであっても、もう少し頑張らなくてはと考えている。

〈横浜市磯子区・主婦・四六歳〉

●市民作文「わたしの中のアジアと日本」特別賞作品

④都市レベルの国際交流

国連アジア・太平洋都市会議の開催にあたって

岡部重之

一――バンコクのスラムの人間居住環境
二――人口爆発に悩むアジアの大都市
三――「国際会議」のあらまし
四――都市間交流の契機に

一――バンコクのスラムの人間居住環境

昨年五月、マニラで開催された横浜国際会議の第一回組織委員会に出席の帰路アジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）の本部への表敬のためバンコクに立寄り、クロントイを訪れることができた。

バンコクの人口は、一九七〇年のセンサスでは二七〇万人であったが、一九七八年には四九〇万人に達し、タイ第二の都市チェンマイの一一万人に比べると、タイの人口移動がすさまじいまでの一点集中型であることがわかる。バンコクへは特に東北タイの農村地域からの流入が膨大で、その背景には、農村部での農業技術改良の結果、商品経済が農村にまで入り込み、数多くの脱落者を出しているなどの事情があると言われている。

さて、クロントイであるが、首都バンコクのクロントイ港湾局が一九七〇年に世銀から一、二〇〇万ドルの借款を得て、港湾の拡張計画に基づいて造成した港湾局用地（国有地）に不法占拠する住居群で、人口は四万人、半分は十五歳以下の年少人口である。モンスーンの時期には、床まで水が上るような低湿地に堀立て高床式の住居が、ごちゃごちゃに詰め込まれている。通路として、不安定な板の桟道がつくられている。住居は、平均二五平方米程度の一部屋で、平均世帯人員六人が寝起きしている。炊事、洗濯、暑い熱帯の生活で欠かせない水浴などは、家の前の桟道を使って行われる。下の湿地には、もちろん下水はないが、衛生工学に造詣の深い佐藤助役の解説では、地域一帯が巨大な浄化槽となっているとのことで見た目よりも意外に悪臭はない。電気と水は最近引き込まれたようで、衛生状態は、かなり改善されてきている。

クロントイの男性は、港湾建設、港湾荷役あるいは運輸労働者として、一日二ドル程度稼いでいる。女性は、裁縫、花輪作り、袋張りなどの内職のほか、外で行商、露店商をやるか、工場に働きに出る。子供も一二歳位までは、母親の手伝いをするか、街頭で車相手の花輪売り、新聞売りをして家計の足しにしている。一三歳以上の子供は、大人と肩を並べて働きに出る。このようにして一世帯当り平均六〇ドルを得ており、米の御飯以外の食物は殆んど調理されたものを買わなければならないタイの生活習慣を考えるとき、最低限の生活がどうやら維持できる程度の額であると言われている。

このような人間の尊厳さえも守れないような最低限度の生活環境に対し、公的なサービスは殆んど行われていない。例えばゴミの収集はないし、診療所、政府の福祉センターもない。住民登録のない住民には、公的教育の機会は与えられていない。不法占拠居住者に対し、居住権を承認することになることを恐れてか、